

『機友会』創立50周年にあたって

2008年5月28日 長友 康夫

昭和三十三年三月、工学部第一回入学生生のスタートは、夜学に使われていた天六校舎の地下室でした。千里山に新校舎が、完成するまでの間借り授業です。

現役組から小生のように三浪組まで様々な顔ぶれで友達は少し出来ました。教授の先生方との接触は全くありませんでした。

何とかしなければ、大切な大学生活が勿体無いと思っていました。ある日何時ものように、娯楽室で「暮」を打っている時、山口博己君に小生の思いを告げたところ、彼も同じ思いだったらしく、先生と学生の間をつなぐ会を創ろうと話が纏りました。

その日の内に会の名前と規則の草案を練り上げました。

名前は「奇友会」「機友会」のどちらか。先生方とのパイプ役は年齢から見ても、我々の兄貴のような下間先生にお願いしようと思いましたが、

早速下間先生に相談に行ったら、ところ気持ちよく引き受けて頂く事が出来たばかりでなく、『機友会』のロゴまで考えて下さいました。

その翌年一九五九年には明石の岩屋へ一九六〇年は和歌浦へ一九六一年には比叡山・石山寺へと毎年春に行楽会を企画し、親睦を深めました。

この原稿を起稿するにあたり、四十六年振りに、当時の写真や日記を探し出し、眺めていると若かりしあの頃の思い出が昨日の事のように蘇って参ります。

昭和三十七年卒業式の十一日前に結婚する為に日南に帰省していた小生に、「機構字の単位が取れていない、追試験を受けないと卒業が出来ない」とわざわざ電報で、知らせて頂いた

田中教授のこと、長岡京にあった下間教授の家にお伺いして、屋根の修理を手伝った日のこと、親身になって就職の世話をしてくださった葛原教授の宗家のような言動の数々、「たまには、俺の授業にも顔をみせてくれよ」と内燃機関のテスト中に優しく声を掛けて下さった勝田教授等々。

京都大学の医学部志望で浪人を続けていた小生が、腕試しのつもりで受けた工学部でも、たまたま新入生代表として「宣誓」を読むことになったことから四年間関西大学工学部機械科に席を置かせて頂き、先生方にとっては厄介な世話のかかる生徒だったでしょうが、小生には次から次へと思い出が湧き出てくる大学生活でした。

先生方、同級生みんなに感謝！